

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

現代ロシア語の人称と数に通底するもの：
話者のまなざしと聞き手

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2001-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 光昭, Murakami, Mitsuaki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/945

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



現代ロシア語の人称と数に通底するもの

話者のまなざしと聞き手

村上光昭

- 1) Наши собеседники говорят о схожих вещах другими словами¹
1') 私たちの対話者は類似の事柄を違うことばを使って話しています。
1'') 私たちの対話者が類似の事柄を語るのに違うことばを使っています。

いずれの地にあっても、その現実の中で人の暮らしは単純なことである。ことばを用いる状況として、話者の眼差しは、それぞれ異なることばの使用であって、何ら問題はない。しかしひとたび母語と異国語との対応となると1')と1'')と提示されると、どちらがどうだという問題を引き起こすことになる。この読みに対象言語の理解の原点があるという考えで、稿を起こすことにする。

ここでもやはり、話者・書き手に基点をおいて、書かれたテキストから得られたものから、発言という行為が実現できるように考えることである。日本語を母語とするものが、たとえばロシア語を学ぶにあたって、母語から外国語へ至る道を探るささやかだが尊大な試みである。この際利用するのは、現代語で書かれたテキストであって、文字化されることなく流通することばではない。しかしことばの運用者が筆者・読者間であつても、話者・聴者と等価ということにする。これは言語が分節音を文字化したものであるとうことが自明であるからである。

扱うのは、話者意識と聴者意識、意識の言語化、ある現実への話者の眼差

1 E.Петровская 1998, Предисловие в «Илья Кабаков, Борис Гройс Диалоги» стр. 7

し、意識の言語化と、その言語を理解する話者の立場、母語と異国語、働きかけの文法と受け手の文法の対照、状況の意味組成の操作と意味解読操作、同一状況に当事者のあるなしによる差異。これらを抽象的に言語記号の非対称二重性という意味の多元的捻れを考えてみることにする。

記述文法の成果をふまえて、ロシア語教育をするなかで機能文法、伝達文法、働きかけの文法を提示するのが目的であるが、多大の困難を来す中で、母語と異国語の文化的背景の差異や言語外現実（状況）のボンダルコのいう言語解釈の差異からくる、理解度の落差、指示の仕方の差異を明らかにして、働きかけの文法の一つの条件を考えてみることである。個別化から一般化へ、一般化から個別化へという話者の自己中心性意識の無限の伸縮を母語と異国語での間の差異を確認した上で、自己の意識操作を母語から異国語へと無限の往還を示せるのではないかと考えている。言語一般を扱うにつけ、母語の日本語で考えることもない言語構造や、文法構造が、ひとたび外国語を学ぶ過程で、外国語の文法を学びその中で、母語の構造を考えるのは、意味自体が普遍的なものであるとはいえ、母語を欠いては理解不可能であるからである。母語を用いれば世界をすべて自らのことばで覆い尽くすことが可能だというのは、誇張しすぎであっても、間違っていないのは、なぜであるのか。これは、個人の言語能力によるというより、まさに言語を用いて言語活動を過不足なく実現していくからであり、欠落をも自ら言語の用い方で埋め合わせをするからである。それが外国語であるとうなるのか。

まず世界の認識者として、言語を用い、ことばにする。この根本にある認識過程と、認識の言語解釈を経ての言語化という点について考えてみる。ここでひとつ意識作用の赴くところを A. ベーリイの「ペテルグルグ」の第一章から、原典を挟んで出版された訳と拙訳とを挙げてみよう。

頭脳の戯れは仮面にすぎぬ。この仮面の下で脳髓の中に様々な力が進入しているのである。アポローン・アポローノヴィッチが我々の脳髓から

織り出されたのであったとしても、かれはやはり、ある種の夜ごと人を襲い驚かせる存在のおかげで驚愕を呼び起こすことであろう。この存在のいろいろな属性は、アポローン・アポローノヴィチにも与えられている。この存在の属性は彼の頭脳の戯れにも分かち与えられている。

彼の脳髓が一度神秘的な見知らぬ男にすっかり夢中になると、この見知らぬ男は存在する、実際に存在するようになる。元老院議員がこのような考え方を持って存在するあいだは、このペテルブルグの大通りから消えることはない。なぜなら意識の中に発した思考はそれ自身の存在を獲得しているからである。

(川端香男里訳)

Мозговая игра—только маска; под этою маскою совершается вторжение в мозг разнообразия сил: и пусть Аполлон Аполлонович соткан из нашего мозга, он сумеет все-таки напугать неким, потрясающим бытием, нападающим ночью. Атрибутами этого бытия наделен Аполлон Аполлонович; атрибутами этого бытия наделена вся его мозговая игра.

Раз мозг его разыгрался таинственным незнакомцем, незнакомец тот — есть, действительно есть: не исчезнет он с петербургских проспектов, пока существует сенатор с подобными мыслями, потому что и мысль в сознании обладает собственным бытием.

(А. Белый, Петербург)

脳髓のゲームはたんなる仮面である。この仮面のしたでは脳髓へと様々な力が侵入していくのだ。そしてたとえアポローン・アポローノヴィッチを織りあげたのが我々の脳髓によるものであろうと、いずれにしても彼がおびえさせるのは、なにか、震い上がらせるその存在で、夜中に襲いかかってくるせいだ。この存在にからむものを持ち合わせているのがアポローン・アポローノヴィッチだ。この存在にまつわるものが彼の脳髓のゲームそのものだ。

ひとたび彼の脳髓が密かな見知らぬ者に夢中になってしまうと、この見知らぬ者は存在し、実際存在するのである。その者がペテルブルグの大通りから決して消えることなどないのは、元老員が同じような様々な考えを持ってずっと存在しているからだ。なぜなら思考というものは意識の中で存在するものとなるからだ。

これを挙げたのは、まず第一は、冒頭に挙げた1)の文と同じことを、翻訳者同士が書いて示していることになる。翻訳における原典の理解の程度を云々するのではなく、理解の基にある対象言語の理解が母語の観点に立ったものであるのか、その逆であるのかということである。理解しているけれど、理解を邪魔したり阻む源泉は何であるのかという問題である。大多数の言語研究者は言語の完全な理解が自明だということがあるから、翻訳の質など問題にはしない。つまり彼の地の母語話者と同一レベルやそれ以上にあるから問題とはなり得ないのである。それをつゆ知らぬ母語専一話者にとっては示された、翻訳者経由の作品世界は、歪みを生ずることもある。この問題は、言語学の話し手責任や聞き手責任にかかわり、後者が生み出す捻れをともなった誤解となる。

「翻訳の日本語」で川村二郎が大正二年1913と昭和四十九年1974の翻訳を比較して、「……ただ、なぜ誤訳になったか、その理由を考えると、語学力不足といった話だけでは片づかないと思われる。」² ここでの問題は、翻訳の質として時代の制約はあるにしても、尋常では理解しにくいところが、何に起因するのかは、もう少し単純化した、ごく初歩的なところであるようである。それは、日本語の実態を訳者が十分把握し切れていないこと、また難しい読み物は、当然難しいのだという神話のごとき知性過大評価であろうと思われる。日本語の書き言葉と話し言葉の乖離度が大きいというより、書いて

2 川村二郎 「翻訳の日本語」1981 p13. 岩野泡鳴「アサ シモンズ 表象派の文学運動」と土岐恒二の翻訳を挙げて、翻訳での工夫を挙げながらも上のように書いている。同書後半の池内紀の「翻訳と日本語」も示唆に富んでいる。

示されたものだけから理解を無理矢理しようとしており、現実には指示するものの実態を現に想像力で覆い尽くしていない。また翻訳過程で導入された日本語文体が、単純な理解を拒むがごとき日本語翻訳を造出したと言って過言ではない。言語を研究するものは、まさにこのような難解さのいずる原因を解明して、それにふさわしい文体を創造するか、あるいは、より正しい理解を生み出すような、異国語と母国語の言語構造の解明と対応を現代語のレベルで提示するべきであろう。ステパノフが言語理論の避けて通れぬ対象の心理的現実に関していうように「範疇は同時に三分野、思考、心理、言語において最高度に一般化されている。したがって三重に帰属しているおかげで範疇を適切に明らかにできる。」³

英語においてすら川村の指摘であるから、ロシア語ではどうなのであろうかとパステルナークのドクトル・ジヴァゴの原典、英訳、独訳、蘭訳、日本語訳の冒頭部を比べてみると、言語構造の差異から来る違いはありそうである。しかも日本語訳はイタリア語訳を参照したとして、ロシア語原典からの翻訳ではないので、問題がさらにあるようである。

Доктор Живаго

「とわのみたま」をうたいながら練っていった。歌いやめる度ごとに、葬列の足音、馬の蹄の響、さっと吹きつける風のうなりが、引き継いで歌いつづけけるようだった。

通りすがりのひとたちは道を譲り、花輪をかぞえ、十字をきった。好奇心にかられて、列にくわわる者もいた。「どなた様のお葬いです？」と尋ねた。——「ジヴァゴさんです」——「あ、なるほど。それでわかった」——「旦那じゃなく、奥さんのほうですよ」——「どちらにしても、おなじことです。ご冥福を祈ります。いいお葬式ですな」

原子林二郎 1959

3 Ю.С. Степанов Имена Предикаты Предложения М. 1981 стр.38

日本語を読む立場にあれば、原典などかかわりなく、日本語が正しいものであると受け入れるのが普通である。一度翻訳が出版されると、歓迎されないにかかわらず、それが日本語として一人歩きをするものである⁴。私たちはごく自然にこれを受け入れるのである。このドクトル・ジヴァゴの冒頭は、訳では、なるほど葬列で、「とわのみたま」を歌っている。だから一節一節繰り返し、歌がとまるのは自然な話であると訳者は考えているようである。また「好奇心にかられて、列にくわわる者もいた。」と読めば納得してしまいそうだが、好奇心に駆られて葬列に加わるのは、露国の人だからなのか、と疑問まで出てくる。そこで、翻訳から原典へと至ることにしよう。

On they went, singing 'Eternal Memory', and whenever they stopped, the sound of their feet, the horses and the gusts of wind seemed to carry on their singing.

Passers-by made way for the prosession, counted the wreaths and crossed themselves.

Some joined in out of curiosity and asked: "Who is being buried?"
— 'Zhivago,' they were told. — 'Oh, I see. That explains it.'
— 'It isn't him. It's his wife.' — 'Well, it comes to the same thing. May she rest in peace. It's a fine funeral.'

Max Hayward and Manua Narai.⁵ 1958

4 訳者はあとがきでこうかいている。

残念ながらロシア語版が入手不可能でしたので、最初はマックス・ハーワードとマーニヤ・ハラルの共訳による英語版で上巻の半分近くを訳しましたが、ピエトロ・スペレミッチのイタリア語版と米国版を入手するに及んで、英国版が誤りだらけで、粗雑な翻訳であることを知り、始めから翻訳し直しました。米国版は英国版と同じ翻訳者ということになっていますが、英国版を改訳したという以上に違うところを見ますと、訳者が違うのが、なにかの都合で、英国版の訳者の名を掲げねばならなかったように思われます。翻訳としてはイタリア語版がもっとも優れており、米国版がそれに次いでいますので、米伊版を一行ごとにつきあわせて邦訳しました。

5 Translators' note

Pasternak's prose has astonishing power, subtlety and range. While always remaining simple and colloquial, it is exceptionally rich and poetic. Indeed, he makes use of sound and word association in the manner of a poet of genius. His language has a vitality which must be rare in the literature of any country and is perhaps unique in that

Ze liepen en liepen maar door en zongen 'Eeuwige herinnering', en steeds als zij ophielden leek het, alsof hun benen, de paarden, de windvlagen op hun eigen ritme doorgingen met zingen.

De voorbijgangers lieten de stoet passeren, telden de kransen en sloegen een kruis. De nieuwsgierigen sloten zich bij de processie aan en vroegen: 'Wie wordt er begraven?' Men antwoordde hun: 'Zjivago.' 'O. Dat verklaart alles.' 'Nee, niet hij, maar zij.' 'Dat blijft gelijk. God hebbe haar ziel. Een rijke begrafenis.'

Nico Scheepmaker, 1958

Man ging und ging und sang >Ewiges Gedenken<. Und wenn die Stimmen verstummt, tönte der Trauergesang fort im Rhythmus der Schritte, im Geklapper der Pferdehufe und im Wehen des Windes.

Passanten gaben den Weg frei, um den Trauerzug vorbeiziehen zu lassen, sie zählten die Kränze und bekreuzigten sich. Neugierige schlossen sich der Prozession an und fragten: >Wer wird begraben?< — >Schiwago<, hieß die Antwort. — Das also war es. Man mußte es wissen. Aber nicht ihn begrub man. Sie, seine Frau. Es kam auf das gleiche heraus. Gott gebe ihrer Seele Frieden. Sanft möge sie ruhen. Ein reiches Begräbnis!— Reinhold von Walter, 1958

蘭語にしても独語にしても原典のロシア語の理解が正しいとか正しくないとはいえない。つまり読む者が責任を果たして、不足する要素を勘案して、補って完成した翻訳文であるからである。また言語文化、葬儀の執り行

\ of Russia.

Needles to say, these very qualities face the translators with difficulties which are almost insurmountable, and we have no illusions that we have done justice, even remotely, to the original.

...

We trust one day *Doctor Zjhivago* will appear in Russia and fall into the hands of a translator whose talent is equal to that of its author. All that we can hope for in the meantime is that we may have given English readers some approximate idea of the merits of this great work.

われ方自体深く精神作用に関わり、異国人の宗教文化言語の理解が異ってくる。いずれの翻訳も日本語と同じく、原典の第三番目の動詞形の理解が、多層である。英語のみが単純に原典と同じである。この部分状況の表現をみて、ロシア語での言語構造と語彙化とそれをどう理解するのかということになる。原典はこうである：

Шли и шли и пели «Вечную память», и когда останавливались, казалось, что ее по залаженному продолжают петь ноги, лошади, дуновения ветра.

Прохожие пропускали шествие, считали венки, крестились. Любопытные входили в процессию, спрашивали: «Кого хоронят?» Им отвечали: «Живаго». — Вот оно что. Тогда понятно. — Да не его. Ее. — Все равно. Царствие небесное. Похороны богатые.

Б. Пастернак, Доктор Живаго, 1957

真相はどうなのであろうか。ゼロ記号の意味をかつて、オフシャニコ・クリコフスキイの不定形文の扱いで、「振り返って主語を探す」という、第四人称というタームを用いていたが、もちろんこれは受け入れられないのであるが、書き手・話し手には自明のことであって、読み手・聞き手には、この振り返って主語を探すという意識活動があるのだ⁶。現代言語学や類型学では、話し手責任、聞き手責任として問題を扱っている。言語を用いるものは場があって言語使用に及ぶものであること。ここでは単に不定人称文だと規定して終わるのではない。またさきのA. ベーリイのように思考というものは意識の中で存在するものとなるからだということ、ひとたび進み始めると自由闊達なものとなり、ある語がある観念と結びつくと、限りなく拡散していくのである。これは異国語を母語に移す場合に、とくに和語、漢語であると、ますます捻れが生じるのである。この文ではロシア語の言語構造をどう理解

6 拙稿「現代ロシア語の不定法文記述への予備的注釈」参照

したかが、母語に現れるわけであるから、注意が必要である。

足を引きずるように葬列が歩き「とわの憶い」を口ずさんでいた、そして止まったとき、ふと、執拗に歌い続けているのは、さきほどの葬列の足音や馬のひずめの音や風の音なのだなとそんな気がした。

通行人達がどうぞお通りとって譲ってくれ、花輪を数え、十字を切っていた。誰のかと気になる人たちが葬列に入ってきて、尋ねた。「どなた様のお葬い？」それに答えて「ジヴァゴです」。——なるほど。だからこうなのですね。——いや、御主人ではないんです。奥様ですよ。——いや、おなじことです。ご愁傷様。立派なお弔いですね。 拙訳

そこで一体何が問題であるのかということ、話し手責任と聞き手責任⁷。まず言語外世界、現実に対して言語を適用するということである、と思われる。現実の状況に対して、それを母語によって、その状況を語るということで、等しくその意味づけは文化背景を伴ってテキストとなって現れる。第一行目からのロシア語の特徴としての不定人称文が現れる。この知識はロシア語を学ぶものは誰にもある。しかし同じ不定人称文の連続になると理解を超えて、様々な状況を想像せねばならない。それでも翻訳は成立する。こんな問題を現代語を扱って書いていると、本人の気づかぬところで陥穽にということがあるのが常である。結局、言語構造を扱う外国語研究者はどの項目も完全であるが、全体の中ではごく一部分不完全であるということがよくあるのである。まさに翻訳は翻訳者の当該時点での成果である。いや到達しえた点で、

7 この部分が働きかけの文法と受け身の文法の落差になり、シチュエルバ以来、ヤコブソン、ヴィノグラードフ、ウスペンスキイ、ボンデルコ、ゾロトヴァなど機能文法への基本的問題がある。個別言語での話し手と聞き手の問題を越えた、もう一つ捻れを加えた異言語間での話し手と聞き手の分節音に載せた意味のやり取りは、極めて重要な問題点をはらんでいるのである。これまでは情報の源泉が当該学習研究言語国ということで、音声までもが、印刷されたテキストに過ぎなかったが、現代的意味においては、そのような情報の理解を基礎にした、解説が必要なのではなく、それに基づいた働きかけが必要なのであり、そのための方法を示すための研究を急務とする。

そこからまだ先がある。

書き出しの文 *Шли и шли и пели* «Вечную память», и когда *останавливались*, казалось, что ее по заложенному продолжают петь ноги, лошади, дуновения ветра. これを読む人はだれも間違っ
て読むことがないのだが、「止まった」と連想される *останавливались* が、止まるものやことを探さねばならないのだが、ロシア語を学ぶだけでなく、このロシア語を外国語として読む日本語母語話者は、止まったのは、すぐ前の歌だろうと言ってしまふ。これは確かに結果として正しい。別に立ち止まる必要もないところに留まるというのは、ここに現れた動詞 *останавливаться* のせいである。BTC を引くと、六つの定義が与えられている。1. *Перестать двигаться, действовать, работать. Поезд остановился у платформы.; Такси остановилось с пронзительным визгом.;* 2. *Прекратиться, прерваться, приостановиться в своем развитии, течении. Жизнь в городе остановилась.;* 3. *Удержаться себя от продолжения какого-л. действия; прекратить, прервать на каком-л. месте. Начал говорить и остановился. На чем мы остановились.;* 4. *на ком-чем. Уделить особое внимание кому-, чему-л: задержаться, сосредоточиться на ком, чем-л. Докладчик остановился на факте аварии.; Подробне остановлюсь на причинах кризиса.;* 5. *на ком-чем. Прийти к какому-л. решению, заключению; остановить свой выбор на ком-, чем-л. Остановился на том, что операцию лучше отложить.;* 6. *Временно расположиться, обосноваться где-л. по приезде, прибытии куда-л. Остановлюсь здесь несколько дней.* この領域からどれがふさわしいのかを、上の文から判断するわけではあるが。果たしてこの動詞は意志的であるのか、そうではないのか、ということにも関わる。

英語訳者はロシア語不定人称文を、主語に they を充填して翻訳しているのに対して、独訳では不定人称的形式 man で、蘭訳では er を用いて書いてよ

いと思われるが、三人称複数形の *zej* であるから英語と同様に不定人称的読みはあるだろう。日本語訳、そしておそらくイタリア語訳もぜんぶ、底本となった最初の訳者をうけている。これら英語以外では、読み手責任を果たして理解の多の補うところが多く、過度の読みへと至っている。英語訳者のいう、パステルナークの散文が「単純でくれたことばでありながら、豊かで詩的である」部分を損ねている。

On they went, singing 'Eternal Memory', and *whenever they stopped*, the sound of their feet, the horses and the gusts of wind seemed to carry on their singing.

Zej liepen en liepen maar door en zongen 'Eeuwige herinnering', en *steeds als zij ophielden leek het*, alsof hun benen, de paarden, de windvlagen op hun eigen ritme doorgingen met zingen.

Man ging und ging und sang ›Ewiges Gedenken‹. Und *wenn die Stimmen verstummten*, tönnte der Trauergesang fort im Rhythmus der Schritte, im Geklapper der Pferdehufe und im Wehen des Windes.

「とわのみたま」をうたいながら練っていった。歌いやめる度ごとに、葬列の足音、馬の蹄の響、さっと吹きつける風のうちが、引き継いで歌いつづけけるようだった。

これによく似た事情は多田道太郎が「日本語の作法」の中「かくされた文法」取り上げているラガナ氏の日本語学習である。学び始めのころ、同氏が幸田文「流れる」の冒頭場面でのつまずきと、戸惑いを挙げている：

「このうちに相違ないが、どこからはいつていいか、勝手口がなかった」

この文は母語話者にとっては何の変哲もない明晰な文であるが、非母語話者にとっては全く明確でないことを、ラガナ氏が述べるに「一見、予想していたよりずっとわかりやすい文体のように思われた。センテンスは短いし、漢字も少ない」。辞書を引いて単語の意味を掴んで、「うち」という意味も我々外国語学習者がするのと同じように「勝手口」から連想して、「家だ」と見当する。

「しかし、おどろいたことには、それぞれの単語の意味はわかっても、全体の意味はどうしてもつかめなかった」

ラガナ氏にはおどろきだったろうが、それは私たちとっても驚きである。どうして全体の意味がつかめないのか。悪戦苦闘したあげく、ラガナ氏の達した解釈は次の通りである。

「ある場所に家が一軒（あるいは数軒）或る。その家は現在では、何か別のもの、おそらく別の家と相違していない（あるいは、昔と変わらない）。誰かが誰かに向かってこう質問する。だれかが（あるいはだれかが）、あるいは何かが（あるいは何が）どこから入って良いか、と。飛躍。過去には、勝手口が無かった」（中略）

この解釈と前の原文とひきくらべてほしい。原文だけではすっきり分かっていたものが、ラガナ氏の解釈だけでは、こちらの頭まで混迷してくる。じつはこの「昏迷」と「平明」とのあいだに、私たち日本人の暗黙の了解、無言の前提、かくされた文法があるようだ。

ラガナ氏の「昏迷を」を避けるためには、ほんの少しことばを補えばよい。

「(さがしていた家は) このうちに相違ないが……」

念を入れれば「(私のさがしていた家は) このうちに相違ないが」……となる。こう念を入れるとうんと分かりやすくなる。その代わりに、野暮ったくなる。小説だと、当然、省略するところである。ところが省略すると、日本語の初心者には「昏迷」のもとになる。

一体何が欠けているのであろうか。これは話者責任の言語であるからの

か、聴者責任の言語であるからなのか。それよりも母語の認識しかたの言語解釈そのものの問題であるのだろうか。結局、多田道太郎は「私たちの認識は、状況（場、空間）を軸に展開される」と纏める⁸。

ソスノーラの文を挙げてみよう。コンテクストが欠如すると分からぬことが多い。

Я вижу ложку, она новенькая, как линкор, круглая, длинная и стальная, как птица. На ложке к нам едут м. и ж., жено-мужи. Вложке 10 детей с зеленым горошком на плечах. Если Ты есть, на какую тоску ты подсунул к берегу эту ложку с живностью, к моим ногам? (В.Соснора, Перо)

スプーンが見えます。おニューで、まるで戦艦、まるくて、ながくて、鋼鉄で、さながら鳥のよう。スプーンに乗ってこちらへやってくるのはエムとジェエ、つま男たち。スプーンの中では十人の子供が青い壺を肩に担いでいる。もしも君がいるのなら、どんな辛い思いをしているからなのだろうか、お前が岸辺に暮らしがのったこのスプーンを、僕の足下へ、差し出してきたのは。

ここに見える単数形は？スプーンのお化けか。それが戦艦のような乗り物になっている。でも子供が10人、はいっている。肩にはあおい壺を担いでいる。ソスノーラの文は詩的散文であるからファンタジックな書き物としてスプーンが船のような乗り物になると認めて、その乗り物に乗っているのは十

8 S.Kubrik 監督の映画 *A colckwork orange* 終わりあたりで、主人公 Alex が昔の暴行相手の老人にワインを振る舞われて、一人で飲むのが気まずくなって、*Would you join me?* 一緒に飲みませんかと嫌に丁重にいうと、老人は *No, I don't join it.* と答えた場面があった。いかにもその場面をもの空間にして、話者が頑と拒否する意味が見える。相手は人間扱いされていないと思えばよいのだろうか。日本語のそれということ化が生じている。また先に挙げた、E. Петровская の二重括弧の“оно”がさまざまな意味を内包して、その言語空間を指している。в *《Илья Кабаков, Борис Гройс Диалоги》* стр. 23.

人の子供。ここまではよい。しかし、肩にあおい壺を担いでいる部分が問題です。一つの壺を担いでいる子供は何人だろうか、いやそれとも、一人の肩 плечо は両肩 плечи であって、十人分の肩が、いや両肩が、集まっても、плечи であるから、十人が一つの青い壺を、きつととても大きいのだろうか、みんなの右か左の肩を出し合って、担いでいるのだろうか。それにしても現実はどうな風景だろうか。これは、まったくラガナ氏の困惑と同じです。

このようなことはごく日常的に生じること。ソローキン氏の対談でもいくつか気になるとことがある。まず指の数と人数との関係を挙げておこう。

《 Якуза 》, страшные уголовники без пальцев, занимаются каким-то делами и не вмешиваются в мою жизнь.

(В.Сорокин, из газет)

<……> は、恐ろしい罪人で指はなく、なにか仕事をしており、私の暮らしには干渉しません。

(уголовник без пальца)+(уголовник без пальца)...

=уголовники без пальцев

(уголовники без пальцев)+(уголовники без пальцев)...

=уголовники без пальцев

露国人は基礎知識がなければこれらの人に指が何本欠けていると推察し感じるのでしょうか。基礎知識のある日本の露語学習者は、без пальца 指のないという限定で、幾本まで指を減じなければならないのだろうか。そんなことを気にもせず、翻訳に取りかかるのでしょうか。さまざまな可能性があるのは上の通りである。しかし一般化のために複数を用いて、уголовники とするのであると、この延長上にある複数形は一般化した指 (без пальцев) であるから、本数は数えなくても良いことになる。

単なる一般化のために複数を使うということを、さらにソローキン氏の対談から挙げてみると：

Меня раздражают чужие прикосновения и запахи. Когда я еду утром на работу в метро, на мне часто спят девушки.

(В.Сорокин, из газет)

私がいらいらするのは他人が触れたり、臭いがするからです。あさ地下鉄で通勤しますと、しばしばうら若き乙女が私にもたれ掛かって居眠りしています。

これでよいはずだが、詳しく見ると、不完了体他動詞が複数形であるのは、後置主語、複数名詞が接続詞で結ばれているからです。この文は Меня раздражают чужие прикосновения と Меня раздражают чужие запахи であるからやはりこれらの複数形は一般化した接触であり臭いであるけれど、やはりこの話者の認識は、体験を語っているのではあるが、ある一定の時間をかけ、あのとき触れられた прикосновение = t^1 、このときも = t^2 、そのときも = t^3 ...、という体験があつてはじめて他人に触れられるという認識に至るわけです。臭いも同じで、臭覚が働いて、異臭を体験するたびに計算され、他人の臭いとして一般化されるわけです。もしこの文が Меня раздражают чужие прикосновение и запах. であれば、具体的な誰かに触れられて私のではない具体的な異臭にいらいらしているということになる。

その次の文では時が指定されて、朝、地下鉄で職場へ行く途上、ここには寄り道という感覚はなく、女の子達が一斉に私にもたれ掛かって居眠りするというのはなく、また両脇からもたれ込まれるという意識も普通はなく、単に、もたれ掛かって居眠りをする女の子が、時々という意味で、複数形である。これが日本語的感觉では、時々女の子が居眠りをするというと、(時々

+居眠りする)は複数であるという意識はあるが、女の子に関しては、もたれ掛かって居眠りする女の子は、一人しかいないということで、単数にして書いてしまうおそれが十分である。この時には、特定の女の子がという意識になってしまう。したがってここでは、時々であってももはや一般化するという意味で、動詞が不完了体、主語対象も複数にせねばならない。

Так вот — японские девушки стоя засыпают на мне потому, что я большой. Она прислоняется, разевает рот, и ничем не пахнет. Легко-легко французскими духами. Они одеваются очень чисто, при этом, японцы утром душ не принимают. Зато вечером парятся в бане. В каждом хорошем японском доме непременно есть эти бочки, где они себя отваривают. И когда на падение вишневых лепестков любят — пахнут только своими размышлениями о сакуре. (В.Сорокин, из газет)

で、結局は、日本のうら若き乙女が立ったまま私にもたれ掛かって居眠りを始めるのは、私が巨大だからですよ。乙女は寄っかかって、欠伸して、それでいて何の臭いもしない。香るのは微かにフランス製の香水です。彼らの身なりは、とても清潔ですよ、でも、日本人は朝にシャワーを浴びません。そのかわり晩にはお風呂にはいる(熱湯処理する、蒸気風呂に入る)のですよ。立派な家はどこでもかならずこの風呂(桶)があるのです、ここでたっぷりと茹だるのですよ。それでもサクラの花が散るときに愛でるのは、つまり香りを嗅ぐのは、サクラの様々な自分なりの思いだけなのですよ。

この文章でも、最初のうら若き乙女が居眠りするは一般化のために複数の *японские девушки* であるが、次の文のソローキン氏もたれ掛かれて、すぐ横で欠伸をされる *Она прислоняется, разевает рот* ときは、これは一人だけであって、しかし具体的指示は全く欠如しているが、単数の乙女

を人称代名詞 *Она* でうけてある。身なりについては、特定とか、具体的にあの一人ということではなく、一般化して、日本の乙女という意味の複数形 *Они одеваются* である。日本人一般は水浴びしないのに、風呂で茹だるといところが、特に困難を来す。一般的であるから複数形は分かるが、茹だる人も一般化されて、複数形なのに、その茹だる場所が単数形 *в бане* である。ちなみに *на кухне* は機能としてキッチンの役割をすれば、その場所が台所でなくても良いのであるが、*в кухне* はまさにその場所として言及して、設備の整った台所ということになる。しかし風呂は機能だけでどこでもというわけにいかず、設備が明確に整い機能を果たせる場所だから、*в бане* という可能性はあり、この場合は場所だが機能と考えて単数で抽象化しているのかもしれない。ところで日本の各家に *В каждом хорошем японском доме* は、通常は、風呂桶は一つ *бочка* と思うが、それがそうでない。ここが複数形 *эти бочки* なのである。これを理解するためには、各 *каждый* という表現では統語的に単数で示さねばならないが、この単数が寄り集まって、この日本の家々をなしているという、一般化が生じて、初めて、名詞の複数形が現れるということになる。これでは、確かに混乱を来す可能性がある。また桜が散るのは多数ひらひらと舞うのでしっかりと複数形であるけれど、散ること自体は、過程的現象として名詞化された *падение* である。それでも思いは、様々という意味で、抽象名詞でも複数形 *размышлениями* である。このように露国人が我々の状況を見たとき光景状況のロシア語化は、我々の母語で反応する箇所が微妙にずれている。

では日本語ではどうかというと、数の観念は必要に応じて補助的手段を加えて、認識作用を反映する。たとえば、次の新聞からの例は、書き手の数意識がその対象への過度の思いこみが反映しているのであろうが、ある基準を超えているし、またその数の扱い方に一貫性がない：

「人々の胃袋を満たすには十分すぎるのではと思えるぐらいの野菜たち。白菜、菊菜、日本の食材と同じものから、バナナの花、花ニラ、ハスの花といったベトナムならではの野菜もいっぱい。そんな中、デイル、ドクダミ、レモングラス、コリアンダーといったハーブたちが野菜と同じぐらいの量並び、場所を占領しています。」（朝日新聞2001. 10. 4）

先に挙げたパステルナークの表現で名詞・代名詞の数に関して、単数は память, ее, ветер, шествие, процессия, кого, Живаго, оно, его, Ее, все, царствие であり、複数は ноги, лошади, дуновения, прохожие, венки, похороны である。それではこの数意識はどこまで数を観察したのかという問題である。これらの数はすべて視覚を通して、つまり話者・筆者のいるある地点から得られた情報である。少なくとも二つ以上であり、それ以上の計算をしているのは、花輪だけであるが、それもいくつかは分からない。では風の唸りが複数なのはどのように数えているのであろうか。また唸りは他のところでは単数となる。これらは聴覚を通して知覚されたものである。

—Машенька, — опять повторил Ганин, стараясь вложить в эти три слога все то, что пело в них раньше, — ветер, и гудение телеграфных столбов и, счастье, — еще какой-то сокровенный звук, который был самой жизнью этого слова.

(В. Набоков, Машенька)

「マーシェンカ」ともう一度ガーニンが口にして、この三音節にすべてのものを込めようとした。以前その中に歌っていたすべてのものである。風と電信柱の唸りも、それにしあわせ、——さらになにか密かな音となる声である。これこそまさにこのことばの命であった。（拙訳）

(В. Набоков, Машенька)

つまり風や唸りは現象として、聴いて体感するものであって、その感知する度合いによって、時間的に幅のある中で風を感じたり唸りを感じたりすると、複数 *дуновения ветра* であって良いのである。それでは幸せ счастье など抽象名詞は、まさに感じた瞬間の気持ちであって、その時点で分割されたものとして複数形などあり得ない。しかし次の文では妻が風を魔女の助けで何度も何度も吹かせるのであり、三頭立て郵便馬車をどれもこれも完全に支配しどうにでも出来るという、意味で複数形である。しかし、通常、考え、思いという抽象名詞 *предположение* は、単数であるはずが、ここでは、あ のときも、またあ のときもと、ことあるごとに考えに至るといふ思いでの複数形である。

Сегодняшним вечером он окончательно убедился в своих *предположениях* относительно жены. Что жена его при помощи нечистой силы распоряжалась *ветрами и почтовыми тройками*, в этом уж он более не сомневался. (А. Чехов, *Ведьма*)

今晚彼がとうとう合点したのだが、妻について思い当たる節々であった。妻こそが魔女の手を借りて思いのままに風を吹かせ三頭立て郵便馬車を動かしていたのだと、もはや彼は前のようにはどうかと怪訝に思うようなことはなかった。(チャーホフ、*魔女*)

このような言語意識はどこからくるかとの問いには、まさに対象を認識する話者の観察眼とでもいっておこうか。マーク・ピーターセン⁹の英語における冠詞の用い方について、まず論理的演算で冠詞を選定してから、その述語に相当する名詞を探すのであるという指摘は重要である。ロシア語では有標的に不定ものに関しては、前置してそれを表現するが、無標的には単純に個

9. マーク・ピーターセン「日本人の英語」での冠詞と単数と複数、可算、冠詞と複数を参照。

と二個以上の区別の中で、具体と一般を区別する。しかしこのときにも、全体の中で計算を尽くして、個が結局は集合となり多となるときには、複数となる。また一般が抽象に至ることがある反面、抽象名詞には単数しかあり得ないという意識は、複数形をもちいることで抽象的事物がもの化して、個別性が浮かび上がり、この場で一般化という事態も生じる。日本語ではつねに汎用的に単数的な形式で表示するが、意味的には、読み手・聴者の責任で数的な判断がなされる。話者側が明確に数量的な要素を伝達したいときのみ、それに対応した表現が現れる。これは恣意的でもなんでもなく、極めて明快である。

指示の問題を、話者・筆者から見たものの見方が、主語の位置にも現れることを見たが、もちろんこの対象が動詞の従属項で現れることもあり、これら対象の関係と動詞述語の関係が、一致として現れることも、有意味の欠如として現れることもある。

ロシア語の不定人称文とは、主語を提示せず、動詞を三人称複数形でしめし、一般的には、動作主を、挙げる必要がないからか、分からないからか、明示することなく、動作過程のみ明示する文である。これはロシア語や日本語に限ったことではないが、伝達の開始者である話者に最大限の発言の主導権があり、存分にコンテキストに依存して省略を許容していることにも関連している。分からないのは聞き手の所為なのですというタイプの言語であるということの一例である。しかし忘れてはならないのは、状況を説明する・記述する・再現するのが言語であるという点である。言語が現実を作り上げるというのは、文学の構成という点で当然であるということがある。

つまり言語はいかなる観念も言語化できるのである。しかしその原点には、人間の世界認識方法があるのである。言語習得能力を持った人間がこの世界に投げ出されてからの言語運用能力はある種の認識のパターンを反映して、それをいかなる次元でも言語表現に還元出来る意識作用である。

では上の不定人称文列に見る省略されたとも見える、表現していない主体

をどう採ればいいのか。ギャッピング¹⁰にある制約のように、動作主が、表現されていなくても、共通であるから、(i) *Шли* и (i) *шли* и (i) *пели* «Вечную память», и когда (i) *останавливались*, が成立するのである。歌が止まるのであれば、他の表現があるはずである。ここでは (ア) *Мы шли и шли и пели* «Вечную память», и когда *мы останавливались*, あるいは、(イ) (они) *шли и шли и пели* «Вечную память», и когда (они) *останавливались*, となる、話者の観察の差異が現れるはずである。ここに私たちは筆者話者の観察地点を考えることになる。彼は葬列にあるのか、それとも葬列外にあった部外者の目で、葬列を再現しているのだろうか。ロシア語では、少なくとも (ア) のように、筆者が葬列にあったとは考えにくい。葬列外にあるのであれば、しかし明瞭に、(イ) のように葬列の人たちを人称代名詞で、表現するはずもない。なぜなら、人称代名詞が、具体的な人々の言及があった後に初めて、用いられることが常識であるからだ。もっとも、外国語訳はすべて、この *они* に相当する主語代名詞を補充している。このとき問題は、明確な不定人称の意味が明確な独語 *man* であればまだしも、英、蘭語でこの *они* に相当する語が、テキストの開始第一語として現れるのは普通であるのかしら。いずれにしてもこの次元で、歌を歌い止めたのではなく、葬列が止まったのである。いかにロシア語で省略が許容されると言っても、葬列を止めて歌うのではない。*когда они останавливались петь* とは考えられない。なぜならこれは、彼らは立ち止まって歌ったであるからだ。また、歌いやめる度ごとにといった意味は、何回も、歌を歌うのが止まったのだろうか。私たちが光景を見るときにはすべてある過程としてみている。行進も歌を歌うも、過程として捉えて、不完了体で表現する。この過程に止まっても不完了体で表現して、止まったときもすべて不完了体で示すすべてこの葬列の行進に書き手の目が後追いしているのである。止まっ

10 Он очень любит Лизу, и по-видимому, нравится ей... (Чехов. Скучная история)
ここでの文全体はいずれも Он であるが、前者では能動的にみえ、省略された空位にあるのは受動的対象であるように見える。

ていたときも、なにか他のものが歌っている気がしたとあるのも不完了体で成立するのである。歌が止まって、代わりに、他のものが歌い続ける気がしたであれば、止まる部分明快に完了体で明示され、停止した空白状況を隔てた雰囲気の中で、なにか他のものが歌い続けるということになるという意識が出てくる。ここは不完了体の過去形が、歌い止める度ごとにに対応させてあるが、ここだけが不完了体の何度もという反復の意味が際だたせて訳出されていて、他の箇所では不完了体過去形なのに反復とは採られていないのはなぜなのか。つぎに казалось で現れている。これは観察者としての話者・筆者が前面に出てきているのである。では「ふと……と思えた」という感覚の中に、葬列としてのプロセスが、ずっと進行中に停止したと単に、一度止まったときにも、まだ葬列の人々が歌い続けている、それはこの弔いの中ではこの歌は歌うものだと言われているからであり、悲しみを伝えるために、メタファーにより悲しみに包まれた重苦しい人々の思いが、引きずるような「足」で表現され、それが馬や風の唸りと「歌い続ける」主語主体になっているのである。だからこそ、次の文にある Прохожие пропускали шествие, считали венки, крестились で、きっと停止したときに通行人が、どうぞと道を譲ったのであろう。ここで通行人はどのような一団だったのか、数人がバラバラと、どうぞと行って葬列を通した、つまり何回かの（停止ごとに）、通したのか、これは現実の状況をどのように話者が、観察したか、あるいは、現実状況、あるいは経験の類推として、表現したかにかかっている。また「誰の弔いか」と尋ねる人が一人であるのに、三人称複数形の不定人称文が用いられ、「ジヴァゴだ」という答えも一人の人がそれに応じたのに、三人称複数形の不定人称文である。単純な文であるのにすべてに関わる状況中にある観察者である話者の態度が、視覚から得る情報から、言語表現となされているのがよく分かるのである。

ここで、問題点を纏めると、現実世界——言語の担い手＝話者——言語表現での話者の位置づけである。言語研究は何も理論的な構築だけではない。

解説も、再構成も、記述もすべて続けられている限り重要である。しかしここで関心のあるのは、捻れの介在する母語と異国語と一つの状況とその言語表現である。しかも原典は異国語である。母語の日本語では言語を操る話者の自己中心性を形式上でたどるのは自明であるから別段の問題はない。しかしロシア語では自己中心性は、印欧語の基本である、私——今——ここが明瞭に意識されねばならない。

観察者の意識は私——今——ここ、つまり人称構造と述語時称と空間的位置とを基点に、自由自在に言語空間を移動する。しかし、観察者である話者は決してその位置を変えることなく定点に位置する。意識も空間位置も同じである。

これが動詞述語に直接的に関連することであって、不定人称文の述語形式から見える複数形の人数は果たして何人なのか、何を示すのに複数形であるのかという問題にも関わる。確実に言えることは一人であるときだけで、その先は正確に数えるほかない。ここで先に挙げた、正誤は別にして、訳にある、「歌い止める度に」というのは何度「歌を止める」のかという、話者の観察が現れているのである。また観察者のいる地点は容易に移動するし、またズームインしたり、ズームアウトする正確な遠近絞り込み自動焦点つきの目をもっている。これは動詞時制形式で示される動詞時称と同じである。しかしもう一つのアスペクトの中に示された度数が見えているのであって、どちらの数を優先させて数えているのか。つまり（一人が止まる）の複数回であるのか、（一人×複数）、この全体が止まったから複数なのかという問題もあろう。これらをどこまで言語化するかは当該言語そのものに依存するのである。

意識としての観察者の眼差しと、その場での観察対象、刻々と時間が推移するのに、人間のことは時間を止めることができなくても、表現上で時間を固定した自らの意識を自由に羽ばたかせることができるのは自明である。何によって止まるのか、これは動作・行為を示すことによって、停止するの

である。

話者・聴者の区別でロシア語の省略と見受けられる過度の統語位置の空白はコンテキスト依存だけでなくノルマとしての空白がある。日本語では特に空白が多くて、理解不能は読み手の責任である。これと同じレベルの事柄がロシア語にあるのはすでにパステルナークの例で見てきたが、あるべき主語位置の空白は有意味のサインゼロである。ところで話者・書き手が自己中心性を保って作品が描き出されるが、このときに突然主語あるいは述語にその作品の世界とは本来別物であるはずの、書き手が現れる。とくにチェーホフの作品にこれが見られる。その最たるものは、作品中に唐突に作家自身が現れ、読者に問いかけをしてしまうテキストがある。もちろん作家は自らの眼差しで作品を描き、そのまなざしが映画を撮影するカメラのように、ズームイン・ズームアウトを繰り返す。しかし、その場には「私は」などといって飛び出すことはない。一人称で語る、たとえば、「退屈な話」などでは、構成上は何ら問題はなくても、作家自身が物語るのに、ふと尻尾を見せるかのような、語りの振る舞いをする。はては読者に呼びかけまでするのである。以下チェーホフの作品に見られる例を拙訳を併せて挙げておく。

Это перед свадьбой... А что будет после свадьбы, я погагаю, известно не одним только пророками да сомнамбулам.

(Перед свадьбой)

これは結婚前のことだというのに……でも結婚してからどうなのかは、考えますに、分かっているのは、予言者や催眠にかかったものだけではない、ですわな。

(結婚前)

Учитель сделал большие глаза и... только; а почему он не обиделся—это останется для меня навсегда тайною учительского

сердца.

....

—Извольте-с!

Учитель покраснел, съежился и... только. Почему он не указал папаше на дверь — *для меня* останется навсегда тайной учительского сердца... (Папаша)

先生が吃驚して目を丸くして……ただそれだけ。なぜ立腹しなかったのかは、私には永久に先生の心の秘密なのです。

....

「すみませんでございます」

先生は赤面し、もじもじしまして……ただそれだけ。なぜおとっつあんに出ていけとドアを指ささなかったのか、私には永遠に先生の心の秘密なのです。 (おとっつあん)

Теперь лежу я на кровати, кусаю подушку и бью себя по затылку. За душу скребут кошки... *Читатель, как поправить дело?* Как воротить свои слова назад? Что ей сказать или написать? Уму непостижимо! Пропало дело—и как глупо пропало!

(Пропашее дело)

今私は寝台に横になり、枕を咬んで、首筋を叩いています。重苦しい気分だ……読者よ、間違いはどう正せばよいのかね。言ってしまったことばを元に戻すのはどうしたらいいのか。彼女に何を一言いったり、手紙を書けばいいのかなあ。頭では分かりません。おじゃんだ、しかも愚劣にだ。 (取り返しのつかぬ事)

今度は書き手がまったく表面化しなかったのに、話の締めくくりで、文字

通り「私たちも読者に尋ねましょう」と一人称複数形「私たち」が「私」とそのほか私の意識に昇る人が最低限一人いるのである。これが書き手からすると、主人公たるアヒネーエフであろうことは想像に難くない。それから、尋ねる相手は、対格補語で読者である。このさい、上の例にも、呼びかけられた読者は、次の文と同様に、単数である。これは明らかに書き手が、個別にテキストを現に読む人をさして、単数形になっているのである。

Искренность Ванькина не подлежала сомнению. Очевидно, не он насплетничал. «Но кто же? Кто? — Задумался Ахинеев, перебирая в своей памяти всех своих знакомых и стуча себя по груди. — Кто же?»

— Кто же? — *спросим и мы читателя.* (Клевета)

ヴァニキンの誠意は疑いようもない。明らかに、根も葉もないことを言いふらしたのは彼ではない。「では一体誰が。誰ですか——とアヒネーエフが考え込んで、覚えているなかで知人を次々と全員選んで、自らの胸を叩いていた。——誰なのだ。」

——誰ですか——私たちも読者に尋ねましょう。 (誹謗)

次では、諺 Что имеем, не храним, потерявши, плачем持っているものを大切にとっておかない、なくしてから、泣くのだの一部をあげて、さらに、書き手自身の一般化を加えている。この主語なし一人称複数形の述語を持つ文は高度の一般化であり、書き手自身の思いは強く現れている。この短編は、次のテキストに見るように、一人称単数の私が語るなのである。この一般化は、私が前面にあり、その意識の中に一人でも浮かべて引き入れるのである。

Одним только дачникам бог дал способность понимать красоты природы, остальное же человечество относительно этих красот коснеет в глубоком невежестве. Не ценят люди того, чем богаты.

«Что имеем, не храним»; мало того, — что имеем, того не любим. (Приданое)

別荘の住人だけに神様が自然の美しさを理解する力を与えなされた、そのほかの人たちにはあれもこれも美しいものに関して全く無知そのままである。人は豊である基が分かっていない。「持っているものを大切に
とっておかない」。そのうえ、もっているものを愛しはしない。

(嫁入り支度)

話者・書き手の体験を読者の目を借りたかのように一人称の複数形で書いているが、話者・書き手のことである。つまりある記述、自分の回想をしていると、常に私を主語として書いていくのは、未熟度や、なにかどこかが間違っているという印象を与えるのが普通である¹¹。このあたりは日本語の主語の配置、あるかないかなど、なくてもよいのだという言語感覚は、ロシア語以上に聞き手に伝達内容の理解責任が負わされているとも、過剰なものは言語表現しないということにもつながる。

В первый раз посетил я этот домик уже давно, по делу: я привез поклон от хозяина дома, полковника Чикамасова, его жене и дочери. Это первое мое посещение я помню прекрасно. Да и нельзя не помнить.

Вообразите себе маленькую сырую женщину, лет сорока, с ужасом и изумлением глядящую на вас в то время, когда вы выходите из передней в залу. Вы «чужой», гость, «молодой

11 См. Вацлав Нижинский Чувство М.2000 この書「Жизнь, Смерть」と題する手記はほとんどが「я」を主語にたてた文で占められている。過剰であり横溢した「わたし」がそこにある。

человек» — и этого уже достаточно, чтобы повергнуть в изумление и ужас. В руках у вас нет ни кистеня, ни топора, ни револьвера, вы дружелюбно улыбаетесь, но вас встречают тревогой.

—Кого я имею честь и удовольствие видеть?— спрашивает вас дрожащим голосом пожилая женщина, в которой вы узнаете хозяйку Чикамасову.

Вы называете себя и объясняете, зачем пришел. Ужас и изумление сменяются пронзительным, радостным, «ах!» и закатыванием глаз. Это «ах», как эхо, передается из передней в зал, из зала в гостиную, из гостиной в кухню... и так до самого погреба. Скоро весь домик наполняется разноголосыми радостными «ах». Минут через пять вы сидите в гостиной, на большом, мягком, горячем диване, и слышите, как ахает уж вся Московская улица.

(Приданое)

初めてこの家を訪ねたのは、もうずっと前のこと、仕事の上でした。挨拶をたずさへこの家の主人、チカマーソフ大佐から奥さんと娘に届けたのです。この初めての訪問を見事に覚えています。

思い浮かべてくださいよ、小柄なぶよぶよ太ったご婦人なんです。四十才ぐらいで、恐ろしげに驚愕しきって見つめるんですよ。玄関からホールに入っていくときにね。「よそ者」で、客人で、「若者」なんです。だからこれだけでもう驚愕、恐れおののかせてしまうのですよ。手には鎖分銅も、斧も、回転銃ももっていないから、うち解けるように微笑むのです、でも不安に見舞われる。「嬉しくもお目にかかれますのはどなた様でございましょう」と震え声で尋ねる中年の婦人が、チカマーソフの奥方だと分かるのだ。名を名乗って、それから訪問の訳を説明するのです。恐れ驚愕していたのに心を揺すぶるような、喜びに満ちた「嗚呼！」となり、気が遠くなって目が白くなってしまうのです。この「嗚呼！」は、こだまのようで、伝わって、玄関からホールへと、ホールから客間

へ、客間から台所へと……それ結局は地下の食料庫までいきつく。やがて家中が様々な喜びに満ちた「嗚呼」でいっぱいになる。五分ぐらいたって客間にいて、大きな、柔らかな、熱すぎるソファに座って、そうすると聞こえてくるのですよ、モスクワ通りじゅうが嗚呼と叫んでいるのがね。

(嫁入り支度)

次の文では素晴らしいところだという書き手の感覚が、自己の感覚に留まるのであれば、自己表出に過ぎないが、読者の感覚意識に還元したときに初めて対象化された本当に素晴らしいところとなるのである。

Иван Иванович Лапкин, молодой человек приятной наружности, и Анна Семенова Замблицкая, молодая девушка со вздернутым носиком, спустились вниз по крутому берегу и уселись на скамеечке. Скамеечка стояла у самой воды, между густыми кустами молодого ивняка. Чудное местечко! Сели бы тут, и вы скрыты от мира—видят вас одни только рыбы да пауки-плауны, молнией бегающие по воде.

(Злой мальчик)

イヴァン・イヴァーヌイッチ・ラープキンは、見ている気持のいい青年で、アンナ・セミョーノヴナ・ザムブリツカヤは、うら若き乞女、かわいい鼻は上を向いておりますが、二人は急坂の土手を下りていき、ベンチに腰を落ち着けました。ベンチはすぐ水際にあり、若い柳の茂みと茂みの間にあるのです。嗚呼、素晴らしいところだ。ここに腰を掛けておれば、すべてから隠れていますから、見るものは魚とみずすましかけです。ええ、稲妻のように水面を駆けているのですよ。

(悪ガキ)

つぎの「わたしたち」はかなり問題をはらんでいる。チャーホフ無常観を見事にこっそりと表現する箇所であるが、物語のある情景中にふとわたした

ちが出てくるのである。ロシア語学術論文の常套手段の筆者を示す「私たち」と同程度となるという読み手の感覚は、客観的抽象的現象事象を論述するときの自己が拡大した普遍的な立場へ至ると、すこぶる人間的な恋愛の一場面に、筆者がその内容までをも冷徹なものとしてコメント差し挟む、そこに読者を引き込む見事な方法である。これは、つい先頃まで多用された我々とは全く次元が異なる。¹²

В Ореанде сидели на скамье, недалеко от церкви, смотрели вниз на море и молчали. Ялта была едва видна сквозь утренний туман, на вершинах гор неподвижно стояли белые облака. Листва не шевелилась на деревьях, кричали цикады, и однообразный, глухой шум моря, доносившийся снизу, говорил о покое, о вечном сне, какой ожидает нас. Так шумело внизу, когда еще тут не было ни Ялты, ни Ореанды, теперь шумит и будет шуметь так же равнодушно и глухо, когда нас не будет. И в этом постоянстве, полном равнодушии к жизни и смерти каждого из нас кроется, быть может, залог нашего вечного спасения, непрерывного движения, жизни на земле, непрерывного совершенства. Сидя рядом с молодой женщиной, которая на рассвете казалась такой красивой, успокоенный и очарованный в виду этой сказочной обстановки—моря, гор, облаков, широкого неба, Гуров думал о том, как, в сущности, если вдуматься, все прекрасно на этом свете, все, кроме того, что мы сами мыслим и делаем, когда забываем о высших целях бытия, о своем человеческом достоинстве.

(Дама с собачкой)

オレアンダでベンチに座っていた。教会からは近いところで、眼下の海を見つめたまま、黙っていた。

ヤルタはかろうじて朝靄ごしに見えていた。あちこち山の頂には白い雲

12 スラヴェンカ・ドラクリッチ「カフェヨーロッパ」イントロダクション——人称複数形を参照。

がかかって動かなかった。木々の葉は動かず、蟬がやかましく鳴いていた、そして静かな波音が、下から運ばれてきて、穏やかとは、永久の夢とはこういうものだ、語りかけている。そんな夢に私たち今ここで向き合っているのだ。眼下でそのように波音をたてていた昔は、ここにはヤルタもオレアンダもなかったが、この今も波音をたてて、これから先に我々がいなくなってもこんな風に関心なく波音をたてているはずだ。そしてこの常に変わらぬことのなかに、私たちめいめいの生死には全く無関心であることに潜んでいる保証は、おそらくは、我々が永遠に救済されますよとか、地上の暮らしが移ろうも絶えることはありませんよ、不断に成就されますよということだろう。横に座った若い女は明け方にはとても美しく見えたが、グローブは落ち着き払って、うっとりしきっていたのも、このおとぎ話のようなところだからで、つまり海、山、雲、広い空に囲まれていたからだが、本当のところ、深く思いをいたすと、すべてこの世は素晴らしいな、すべてはそうだな、と考えていた。でも私たち自身が明確に考えて行うことなどはないのだ。とくに存在の至高の目的や、自ら人としての尊厳を忘れるものですからね。

(ご婦人と子犬＝「犬を連れた奥さん」)。

認識の場で、話者が目をつける客体を対象化して取り上げる基点が主語であったり、観察や動作の被対象であり、これを認定するのに、単数であったり、複数であったりする。ここにあるのは個別化か、一般化である。個別化といっても、指示対象が具体的に見えるときと、それが個であるのに具体性が見えない場合がある。これに関連して、おそらくは、動詞の非陳述範疇である体とまた陳述範疇の時制が大いに関わっているはずである。つまり個の確認が私、いま、ここで認定され、この場が拡大していき、どこまで認定範囲が確認できるかと考えると、個の空間が時間幅を持つ広い空間にいたり、意識作用そのものの抽象的空間になる。個物認定の操作が、今の具体的場が

拡大していくその意識の中に、判断要素として、ものおよびことにたいして具体と非具体というものの見方が全般的に、動詞の意味範疇である動作と非動作（過程状態）を包み込んで体範疇も時称範疇も一元的に判断する基礎があるはずであると極めて投機的な予測をたてておき、これを紙幅の都合で別項に譲ることにする。しかし、この指示の問題は、意味解釈上でも、文への構造化へも、極めて重要な点である。意味が分からないのは、指示される項が同定できないからである。

参考文献

- Грамматика современного русского литературного языка, М. 1970
Русская грамматика Т. 2. М. 1980
Русская грамматика Т. 2. Praha, 1979
Н.Д.Арутюнова Предложение и его смысл М. 1976
Н.Д.Арутюнова Язык и мир человека М. 1998
А.В.Бондарко Функциональная грамматика, Л. 1984 拙訳 ボンダルコ機能文法 (1998)
А.Б.Бондарко <Эквивалентность при существовании различия>: концепция Р.О.Якобсона и современная проблематика стратификации семантики// Роман Якобсон Тексты, документы, исследования. М. 1999
В.В.Виноградов Основные вопросы синтаксиса предложения (На материале русского языка) в сб ст. <Исследования по русской грамматике>, М. 1975
Г.А.Золотова О субъекте предложения в современном русском языке // Филологические Науки 1981. No1.
Г.А.Золотова Коммуникативные аспекты русского синтаксиса М. 1982
Г.А.Золотова Синтаксический словарь М. 1988
Г.А.Золотова Говорящее лицо и структура текста в сб. ст. <Язык-Система, Язык-Текст, Язык-Способность>, М. 1995
Г.А.Золотова et al Коммуникативная грамматика русского языка М. 1998
Г.А.Золотова Грамматика как наука о человеке//Русский язык в научном освещении No1, 2001 М. 2001
A.V.Isacenko Gramaticaká stavba Ruštiny v provaní so slovenčinou II Morfológia Bratislava 1960
Исследования по языкознанию К 70-летию члена-корреспондента РАН А.В.Бондарко СПб. 2001

- И.С.Карцевский Повторительный курс русского языка М.-Л. 1928 拙訳 カル
ツェフスキイ ロシア語復習過程 (1997)
- Овсяннико-Куликовский Синтаксис русского языка СПб. 1912
- Проблемы функциональной грамматики М.1985
- Ю.С.Степанов Имена, Предикаты, Предложения М.1981
- Ю.С.Степанов Язык и метод М.1998
- Семантические типы предикатов М.1982
- Типология вида М.1998
- Теория Функциональной Грамматики Введение, Аспектуальность, Временная
локализованность, Таксис М.1987
- Б.А.Успенский Проблемы лингвистической типологии в аспекте различения
«говорящего» (адресанта) и «слушающего» (адресата) // Избранные
труды Т.III, Общее и славянское языкознание. М.1997
- А.А.Шахматов Синтаксис русского языка Л.1941
- R.O.Jakobson On linguistic aspects of translation, Selected Writings II,
The Hague-Paris 1971
- R.O.Jakobson Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb Selected
Writings II, The Hague-Paris 1971
- 北原保雄 日本語の文法 日本語の世界6 東京 1981
- 北原保雄 表現文法の方法 東京 1996
- 川本二郎 翻訳の日本語 日本語の世界15 東京 1981
- 翻訳の手法 川本皓嗣・井上健一編 東京 1997
- マイク・ピーターセン 日本人の英語 東京 1988
- 村上光昭 現代ロシア語の不定法文記述への予備的注釈 神戸外大論叢 42.1, 1991
—— 現代ロシア語の学校文法における機能モデルへの視座 神戸外大論叢51.4,
2000
- スラヴェントカ・ドラクリッチ カフェ・ヨーロッパ 長場真砂子訳 東京 1998
- 多田道太郎 日本語の作法 東京 1996
- Илья Кабаков, Борис Гройс Диалоги (1990-1994) М.1999
- Вацлав Нижинский Чувство М. 2000
- Б.Пастернак Доктор Живаго Milano 1957
- B.Pasternak Doctor Zhivago translated by Max Nayward and Manya
Harari London 1958
- B.Pasternak Doctor Zjivago vertaald door Nico Scheepmaker Utrecht/
Antwerpen 1958
- B.Pasternak Doctor Schiwago übersetzt von einhold von Walter Frankfurt
a.M.1958

パステルナーク 第一部 原子林二郎訳 東京 1959

A. Белый Петербург M.1979

A. ベーライ ペテルブルグ (上) 川端香男里訳 東京 1999

B. Соснора Дом дней СПб. 1997

БТС : Большой толковый словарь русского языка СПб. 1998